

J. スウィフト『桶物語』の風刺

宮 井 敏

風刺家が風刺を行なう場合には、それが何であるにせよ、風刺家の規範意識がまず出発点となっている。そして又風刺は風刺家が当面向い合う巨大な現実に対して直接参加がはばまれる時に、やみ難い問題提起の衝動として生まれて来るものであろう。つまり風刺は風刺家の「非力を前提とした、彼なりの規範にもとずく自己主張の一形式である」ということになる。

ところで、この『桶物語』はよく知られているように Swift の初期の文学活動を代表する作品であり、文豪第二の傑作であるとされている。実際の執筆年代については諸説あるが、およそ筆者が Moor Park の Sir William Temple 邸での寄食生活のころのことであり、いまだ志を得ぬ雌伏の時代であったといえよう。一方、彼の最大の傑作 *Gulliver's Travels into Several Remote Nations of the World* が出版されたのは、失意のうちに Dublin に隠棲して12年、1726年のことであり、この間およそ30年、彼の政治活動には時に消長はあったが牧界生活と平行してほゞ間断なくつづけられているが、二、三の戯文を除けばその文筆活動はまず殆ど政治的パンフレットに集中しており、とりわけ彼の政論家としての最盛期とみられる1701年から1714年にかけての期間には、政治論、時評、教会論のみしか書かれていないわけである。このことはもともと彼の志があくまでも筆を取って天下の事を論ずるにあり、花鳥風月は彼の想いの外にあった事を示すものであろうが、同時に又社会への直接参加が筆にせよ足にせよ可能な時には、風刺家といえども自己主張を風刺に訴えることはない、という例証ともなる。

さて、Swift が Moor Park に居た間は、政界の大立物との接触もなく、

発言の機会もなく、未だ世に知られぬ白面の聖職志願者であったわけであるが、反面後年の失意の境遇も知らず、政治のメカニズムにも幻滅していない頃のことであり、それだけに後期を代表する『ガリバー旅行記』に底流する暗いペシミズムや追詰められた狂気とは違って替って、この作品にはあり余る才能や豊かな学識が旺盛しており、この矛盾にみちた複雑な性格の風刺家の基本的な特徴がいかにあらわれているのである。

まず、*A Tale of a Tub* という題名の由来については Preface における作者自身の解題の通り² であろうが、これに先立って、An Apology, To the Right Honourable John Lord Somers, The Bookseller to the Reader, The Epistle Dedicatory to his Royal Highness Prince Posterity 等々と献辞、序文、緒言、とならべ立てた事自体が当時の書物の刊行体裁のパロディとなっており、本文の風刺の内容自体も又きわめて複雑で多重的に展開されてゆくわけである。

父親から遺贈された上衣を糸一本ふやしもしないで手入れよく着用しなければいけないと遺言された三人の息子が、はじめこそ神妙に暮していたが、やがて都へのぼってさまざまな都会的悪徳を身につけ、次第に都振りに馴染んでゆく。長兄 Peter の悪知恵で何とか遺言状の文言にそむかずに辻褄を合わせようとして、肩章がはやれば“Shoulder-knots”という言葉すら書かれていないのにその一字づつがどこかにあればよい事にしようを決めて、さっさと上衣に流行の肩章をつけてのし歩くはなし。金モールがはやると遺言の正文にこそふれないが、死んだ親爺がかまわないと云ったのを聞いたと下男が喋っているのを聞いたという人の話を聞いたと Peter が頑張るのでよいことにしようとなったはなし。或は又、深紅の裏地をつけないと幅が利かないので、あとから見付かったという遺言状付属書に差支えなしと書いてあったというので早速に仕立て直しをしたり、銀の縁飾りは文言を比喩的に読み替えれば OK であるとしたり、拡張解釈すればワッペンもつけてよいことになったりする話がまず出て来る。

これは第一に長兄 Peter で示されるローマ教会が 聖書以外に口伝の聖伝をみとめて、自分の望む根拠を聖書中に見出しえぬ時には、この聖伝を縦横に活用して辻褃を合わせた事を風刺しているわけであるが、同時に、ローマ教会のたくみな妥協的態度や御都合主義、カトリック系神学者の詭弁、聖伝相互の矛盾なども合せて satirize しているのである。

さらに又、こうした当時の topics に対する topical allusions を超えて、およそ権威ある書物、影響ある思想がのちにさまざまな意図から恣意的にゆがめられて用いられること、つまり、原典の私的歪曲、主観的抜萃などをも期せずして風刺することになる点で、この satire は topicality をこえる universality を獲得しているといえよう。

たとえば現代マルクシズム研究における『仏訳資本論』の問題がある。Marx は1867年9月、Hamburg の Otto Meisner の手によって『資本論』第一部を刊行したが、1872年のロシア語訳にひきつづいてロンドンにあって1872年から75年にかけて女婿 Paul Lafargue の仏訳に協力したといわれている。ところが67年当初のドイツ語原版と舅との質疑応答をまわって女婿が翻訳した仏語版との間には微妙な喰い違いがあるといわれ、『資本論』成立研究の一つのポイントとなっている。又、Engels との共著『ドイツ・イデオロギー』の場合にも同じような問題がある。Marx と Engels の密接な共同研究の成果としては最初のものである本書は、ヘーゲル主義との訣別による唯物史観の確立をマークする、初期マルクス研究の中でも最も重要なものの一つであるが、これが訪英前には完成したものの、当時のドイツの出版事情から第二巻第四章にあたるもののみがまず発表され、のち両名の死後にいわゆるリャザーノフ版（三木清訳はこれによっている）として、極めて不完全な形で編集されたにすぎなかったのである。1932年に到ってソ連の国立マルクス・エンゲルス研究所からアドラッキー版（大月書店版はこれによっている）が出版されたが、とりわけ第三巻にあたる communism についての重要なくだりは、両版で殆ど全ページの入れ替えが行なわれたと伝えられている。原稿

そのものが Engels の筆である事は確認されているのであるが、もともと大へんな悪筆の Marx に替って Engels が口述筆記したものなのか、或は Engels が自ら述べたものに Marx があとから加筆修正したものなのかは古来議論の喧ましい点なのであるが、その後のティルハイン版、一昨年の新メが版、今回の広松版³などを重ねて、こうした点について画期的な研究が出され、いろいろな問題が明らかにされつつあるようである。つまり、従来無批判に受け入れられて来た「マルクス・エンゲルス一体説」から、「両者の持分問題」が新たに持上がり、ひいては唯物史観の生成過程の定説に対する修正から、さらにすすんで従来語義不明であった章句の文意を明らかにする事によって、別途の新解釈が成立するのではないかという問題がおこりつつあるのである。

同じようなことが聖書翻訳の場合にも起って来る。Swift が当時読み得たであろう各種聖書は、Lenin が読み得たであろう Marx・Engels の文献同様意外に少ないものだったろうと想像されるが、せいぜい Authorized Version とローマ教会の公式聖書である Vulgata Version とほか二、三のものに限られていた筈である。はっきりしている事は19世紀に入って急速に成果を上げた本文校訂の果実には遂にふれる事がなかったということである。それにもかかわらず、たとえば当時世上に流布していた筈の Tyndale's Bible の私家版と、はじめて章句分けを採用した Geneva Bible との違いは少くともはっきりと認識されていた筈であり、従ってこの Peter の無原則な遺言状解釈の寓話をもって Swift が原典のすべての現代的解釈を恣意的なものであるとして風刺しているわけではないのである。

およそ、膨大で従って避け難く部分的には矛盾をはらむ思想体系がのちの解釈によって、又当初の原則の後世の現実への適用によってさまざまに整理され応用されてゆくのはまことに当然のことであり、それをしも学説の発展というべきであろうし、又後年のそうした分析に耐えてこそはじめて偉大なる思想と呼びうるものであろう。古典的原理の現代的解釈は単なる修正主義

ではない。逆に膠柱的に公式論に拘泥することのほうがあしき教条主義となる筈である。Swift がこゝで攻撃しているのはむしろ学者の曲学阿世、或は権力者側の御都合主義、モラル喪失、と見るべきであり、その点においてこそこの風刺は時代をこえる普遍性を獲得したといえるのである。

ところで件の Peter はその後さる貴族の知遇を得てその子供の家庭教師となり、さらにはその邸を乗取って弟の Martin と Jack を引入れ、次第に力を得てさまざまないかさまを行なってゆくのであるが、あまりの締付けに閉口した弟二人がついにたまりかねて謀反をおこして、怒り狂った Peter に叩き出され、共同生活を始めるようになる。さいわい二人は Peter がしまい込んでいた箱から遺言状を写し取っていたので、それに照らして上衣を本来の姿に戻そうとして大骨を折るが、Martin の場合、銀の縁飾りを一思いに引剥がしたあとは金モールやワッペンなどは至極慎重にほどいてゆき、ほん元の形に戻すが Jack は生来の短気から、又長兄 Peter に対するはげしい怒りから、最初の段階ですでに力を入れすぎて元の生地を破いてしまい刺繍をほどくところで遂にかんしゃくをおこして、何もかも一緒くたにして溝へ投げ込んでしまうのである。

この次兄 Martin が Martin Luther を、末弟 Jack が Jean Calvin を現わしていると思われることから、三人兄弟が、ローマ教会、ルーテル派、長老派を示すものとも取れるのであるが、同時にこれは又、イギリス国内のカトリック勢力、国教会、非国教徒をも合せて symbolize しているわけであり、そこに作者の風刺の多重性を見る事が出来るのである。

たとえば Peter が遺言状をギリシャかイタリアから来た頑丈な箱に仕舞い込んでいたのをこっそり盗み出して写しを取る筈はギリシャ語の原典からラテン語訳以外、各国語訳を快しとしなかったローマ教会にさからってワルトブルグの城に立てこもって新約聖書のドイツ語訳に専念した Luther その人の姿をうつすものであり、最初こそ一気呵成に不要の装飾を引ちぎったがあとはゆるゆると剥がしにかゝったというのは Luther の宗教改革が領域教

会主義を背景とするドイツの諸侯、一般大衆の支持を得て、騎士戦争、農民戦争をも誘発しつつ幅広く押しすすめられた事を示すものであろう。

ところで実際問題としてルーテル派と国教会の間には、さのみ教義上の類似があるわけではなく、1521年、Church of England の創始者ヘンリー八世が、Luther の改革理論に反駁して法王から信仰の擁護者という称号を与えられた事を考え合わせれば、十六世紀当時はむしろ対立的な立場にあったわけである。従って次兄 Martin に照準を合わせる風刺は時に解釈上ずれを生じて来る筈である。ところが末弟 Jack において示される Calvinism の場合は Jean Calvin その人の厳格主義、予定説、長老派教会制度、さらには親仏的であった Scotland から南下して独立派と共に清教徒革命をになったイギリスの Presbyterian Church まで矛盾なく一貫しており、Jean Calvin の説く教義とりわけ儀型学や救霊予定説に対する攻撃と、非国教徒の言動、とりわけ過度の聖書至上主義、神秘主義的傾向に対する罵りとは隙間なく一致してくるわけである。従って、筆者自身が奉職する教団と重ね合わされる Martin に対する筆と、筆者が仇敵視する Puritan に対する態度とでは極端なまでの違いがあり、こゝに風刺の一つの技法である戯画的手法、つまり、ひそんでいる或る特徴を拡大誇張して見せるやり方がみられるのである。

さて話は Jack が父親の遺言を絶対視するのあまり、その羊皮紙の写しをあたかも万能薬のように端をちぎって呑んだり、痛む足に巻きつけたり、ナイトキャップ代りに頭にのせたり（カルヴィニストの極端な聖書中心主義を風している）、腹の中には火が燃えているからと云って提灯なしで夜出歩いたり、“inward light” をからかっている）そのほかさまざまな奇行を演ずるのであるが、そのうちにいつの間にか Jack と Peter が手を握って（名誉革命直前の James II のあっせんによる旧教徒と長老派の妥協をさす）、Martin をおびき寄せて身ぐるみはいでしまう（その事によって国教会が苦境に立った事を示す）が、今度は Jack が Peter を見捨て（名誉革命後、William III の即位により旧教徒が窮地に立たされたこと）、Jack が大威張り

でのさばり歩いたこと (William III 治下の状況) などがあって、結びの言葉をのべる一章があり、本文がおわりとなっているのである。

以上の物語は「桶物語」本文の第二、四、六、八、十一章をついやしてのべられており、残りの一、三、五、七、九、十章は序論と脱線と称するものにあてられているわけであるが、この Digression が本筋の発展とはかゝりなく、文壇、政界、学界の内幕話から、批評家に対する攻撃、学者に向けてのあてこすり、当時巻を賑わした論争のパロディ、著名人に対する毒舌、筆者をやっつけた文人達に対する応酬など手あたり次第に才気にまかせて風刺する絶好の場となっている。

さて、風刺というものは冒頭にのべたごとく、風刺家の何らかの規範意識にもとずいて行なわれるものであるが、その場合の norm は必ずしも体系的なものである必要はなく、むしろ、風刺家の非体系的な主観的正義感である事が多い。今もし彼が一つの首尾一貫したイデオロギーの持主であるとして彼に行動力があれば実践家となったであらうし、なければユートピアを書いた筈だからである。従って、これらの Digressions も三人兄弟の寓話を本筋とする字義通りの脱線ではなくて、全体が一つとなって渾然たる風刺群を形造る構成になっており、一見放射状に見える攻撃の中心核には Swift のつよい保守的正義感がエネルギー源として存在しているわけである。

又、風刺はその発生起源から云えば短い身振りによる mimicry を言葉におきかえた、寸鉄人を刺す態の短い章句に本来その場をもつものであり、いま、凝縮した風刺体としての epigram にその名残りをとどめている。従って、たとえば Dickens のいくつかの小説に散見するように、realism で書かれた作品のある人物のみが、又特定のある箇所のみが風刺であるという事も充分ありうる事である。こうした場合の風刺の筆は、それが強力であればある程、当初のプランからとび出して、いわば筆の走りから、全体の流れにはつながらないその箇所だけの irony, innuendo, invective となる事があり、同時に最初の目標をはるかにとび越えて筆者の全く予期せざる効果をもたら

す事にも間々なるのである。『桶物語』が大まかに寓話としてのプロットを踏まえながら、よく見れば才気煥発の饒舌の中に散在する雑然とした断片的風刺の集積である点も、又これをもって世に出たいという折角の作者のひそやかな願いとは裏腹に、イギリスのゆるぎない体制の擁護という目的はありながら、アン女王の逆鱗にふれて遂には彼の生涯にも大きな影響を及ぼす事になるのも、思えばR. C. Elliott のいう如く⁴ 風刺の呪術的な力のせいであるともいえようか。

では Swift の場合、考えられる風刺の規範とは何であったであろうか。第一に考えられるのは丁度英国教会の motto でもある *via media* 中庸の立場である。Reason に至上の価値をおく Swift にとってはおろかしき過去の遺風を身にまとうローマ教会の立場はとるに足らず、さりとて改革を唱えて極端に走る Puritans の考えも容るゝところではない、あしきを捨てゝよきを探る中庸の道こそがまず彼の norm であった筈である。そのために彼は Peter を罵り、Jack を嘲けり、Martin を護った。しかるに後年、万人のみるところ *Modest Proposal* や *Gulliver* 第四部に示される Swift の立場はほかならぬ extremist のそれであり、温厚篤実なる中庸の徳を説くべき人物が人生の晩年であって追い詰められた狂気のはて、人の考え及ばぬ極論を吐くに到るというのも、まさに satirist が身をもって示す irony という事にもなる。

それはさておき、18世紀イギリスでは、教会政策論はすなわち政治論に他ならなかった。従って Martin を支持しそれによって国教会を擁護しようという Swift の立場は、中庸とは云い条、とりも直さずその社会的基盤であるトーリー党のサイドに立つことであった。Whigs から Tories への世に云う移党問題はこの際大した問題ではない。早く世に出たいというあせりから来る最初の出だしのやり直しと見ればすむ事である。たしかに彼は名誉革命を容認し、その結果としてのウイッグ体制を肯定した。たゞ理性のしからしむるところに赴くのが彼の本領であったから、同じ理性の旗印を掲げて封建

の遺風と戦っている進歩の陣営に一度は加わってみたものの、その矛盾撞着にたゞちに気付いて、気付くや否や敵対性矛盾も、味方内部の矛盾もおかまいなしに喧嘩をお始め、そのため後世ウィッグ史観に立つ性急な文学史家に進歩でなければ保守であろうとそちらに間違っ て組み入れられてしまっただけのことであろう。

そもそも理性を至高のものとする啓蒙思想は封建制の不合理と戦ってともかくもカリスマ的支配、伝統的支配からの一定の自由をかち得た。ところが古い権威からの自己解放という消極的態度が自らの主体的秩序をうち立てようとする積極的態度に転化するとき、それは次々と開かれてゆく連続的実験を不可欠とした。つまり静的な状況から動的な行動へと変化することになり、それを可動せしめるための目標として常によりよき状態が志向される結果、こゝに進歩の観念が発生して来たわけである。従って、その意味では進歩は理性の本質でも属性でもなく、たゞその一つの条件にすぎず、その条件が本来の目的であると錯覚されるときには多分に非理性的な進歩の側面も時に露呈したりするのである。まことに、Engles の云うごとく、理性とはブルジョワのみのための理性であり、進歩とはブルジョワのみが進歩することであった十八世紀イギリスにおいて、一時は封建社会を打倒した輝かしい勝利者であった Whigs に目を奪われても、そのあしき側面に直ちに気付いて、即刻容赦ない攻撃を加えはじめた Swift の立場はまさに超時代的にブルジョワジーの矛盾に気付いた人のそれであり、およそ一世紀早く、しかも右サイドから資本主義体制を批判したものといえよう。

『桶物語』の中で彼は随所に独特の衣裳哲学を展開しているが、奇しくも没後半世紀にしてその後継者を得た。Sartor Resartus の Thomas Carlyle である。Anglican と Calvinist, realist と romantist ではそれぞれ敵同志みたいなものではあるが、丁度この世紀おわりの産業革命を中にはさんで両者は進歩という名のブルジョワジーのもたらす資本主義経済体制のマイナスの側面と徹底的に対決し、同じ反進歩の立場から鋭く批判したのである。この場

合、両者の思想のよって来たる共通の基盤は“land”であった。A. L. Morton⁵ は Swift が半世紀早く生まれていたらば Cromwell 傘下の Levellers であったかも知れぬというが、それどころか、少くとも心情的には水平派からはね上がった Diggers でさえあったかも知れないのである。それほどにも両者は都市ブルジョワの経済活動の結実たる“money”と、それがもたらすもろもろをにくみ、農村ジェントリの生活基盤たる“land”と、そこにあるすべてに執着した。一は本質的に dynamic なものであり、一は不可避免的に static なものである。農業に詩はあるが商業は小説にしかならぬ。そこで Swift は“mony”と商業とブルジョワと Whigs と小説とをすっかり Daniel Defoe にひきわたし、“land”と農業とジェントリと Tories と風刺とを取ることにしたのである。

そもそも保守は革新によって限定されるものだという。現状を肯定し維持するのに格別の理屈は要らぬが、これを根本的に変更するには何等かの説得力ある理論が必要だからである。しかし、Swift は革新によって限定されざる保守であった。その超時代的な批判の眼は、時あつての党派性はさておき一切のものを容赦することがなかった。だからその風刺の筆は斬人斬馬、すべてを攻撃してやまず、自らの陣営をすら斬り捨てるのにはとどまるところがなかったわけである。いうならば結束弱き党をひきいる政策局長の、partisanship のもとに結集する反対党に向つての苛立ちがそうさせたともいえよう。

これが Swift の風刺の motivation であり、norm であった。その秩序感と怒りと才能とが彼をしてトーリー黨員、国教徒そして風刺家たらしめたのである。

注

- 1 拙論「イヴリン・ウォーの風刺」主流, 第26号 (同志社英文学会)
- 2 Jonathan Swift, *A Tale of a Tub* ed. Herbert Davis (Oxford, Basil Blackwell), 1957.
- 3 広松 渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂新書 61.
- 4 Robert C. Elliott, *The Power of Satire* (Princeton Univ. Press, Princeton), 1960.
- 5 Arthur Leslie Morton, *The English Utopia*, (Lawrence & Wishart, London), 1952.

Jonathan Swift's *A Tale of a Tub*

Bin Miyai

In *A Tale of a Tub*, Jonathan Swift tries to satirize the learning and the establishment of Christian Churches. Centering “Martin” as a symbol of Church of England, he harshly criticizes “Peter”, Roman Catholics, and more harshly “Jack”, all the Calvinist and Presbyterian Churches. At the same time he succeeds in attacking the scholars’ arbitrary explanation and subjective editing of any great original text. His norm as a satirist is seemingly very conservative one, but, he was nothing but the first critic of the capitalistic establishment. His motivation as a satirist is very strong and sharp, because of his fury and irritation to be an outsider from the powerful upper society. So, his satire seems aimless and miscellaneous at a glimpse, but at the bottom of these attacking there lies his subjective sense of justice.